

【以善会レポート】第七弾

山崎千三郎らの大井川疎水計画

Ⅱその背景と挫折の理由を考えるⅡ

中山正清

はじめに

リニア中央新幹線工事で、大井川源流部に掘削しようとしているトンネルが大井川の水量を減らす恐れがあると指摘されていることは、報道などで広く知られているところです。大井川右岸用水の恩恵を受けている掛川市、菊川市などの住民や関係者も、この問題に大きな関心を抱いていることでしょう。

また、現在の大井川右岸用水の基となる構想が、明治時代に松ヶ岡山崎家八代目当主の千三郎らによって「大井川疎水計画」として進められていたことは、『掛川市史』下巻（掛川市、一九九二年）などの記述によって知られていることとされています。

しかし、なぜ千三郎らが明治二十年（一八八七）頃にこの計画を思い付いたのか、なぜこのときの計画が実現しなかったのか、という点について、『掛川市史』などが十分に説明しているとはいえませんが、本稿は、明治二十年頃がどんな時代だったかを考えながら、計画の背景と挫折の理由を考えたいと思います。

一、計画の概要

まず、大井川疎水計画について、その経緯を主に『掛川市史』によってみてみましょう。

まず、大井川の水を城東郡に引くための測量技師を派遣してくれるように関口隆吉静岡県知事に願い出たのが、明治二十年十二月と推測されています。この「疎水工事測量願」（掛川市蔵山崎家文書、『掛川市史資料集』第二号（掛川市、一九七四年）所収）を出したのは、山崎千三郎、鳥井半次郎、松本義一郎、山崎徳次郎でした。

これと同じ頃、この四人に河井重蔵、三橋四郎次、丸尾文六も加えた計七人が「疎水工事測量之儀ニ付願」（同文書、同書所収）を関口知事に提

出し、測量のための立木伐採などの許可を求めています。

千三郎以外の出願者についてみると、山崎徳次郎は、弟の千三郎に家督を譲った前山崎家当主。松本、鳥井は山崎家とともに「御三家」と称された佐野郡掛川宿の資産家。河井は佐野郡上張村、三橋は城東郡丹野村、丸尾は同郡池新田村の資産家です。

千三郎らは測量作業、計画策定を大学院工学士の小山友直に依頼し、明治二十一年二月二十日、松ヶ岡山崎邸で相談、同年三月十日、河井重蔵らが戸長役場に測量開始を届け出ました。その後、同年七月には佐野郡にも用水を引くこととし、同年中にほぼ測量作業は完了したようです。

実地測量の結果である「大井河疏水工事計画説明書」（同文書、同書所収）は明治二十一年一月十一日付で小山工学士によってまとめられました。それによると、まず大井川の取水口から菊川（現島田市菊川）まで引き、菊川の溜池から横地村などを経て佐倉で遠州灘に注ぐ「城東東線」、菊川から海老名の溜池を通り加茂村などを経て沖ノ須で遠州灘に到る「城東西線」、海老名から五明村などを経て細谷村で原野谷川に合流する「佐野線」の三ルート、総延長約八十二キロの計画。工費は地価を除いて四十万円と見積もられました。

翌二十二年一月十日、掛川農学社と吸月楼で報告会が開催されました。『山崎家文書』の中の「疎水測量成績報告来会ノ記事」によると、報告会には山崎千三郎、河井重蔵、岡田良一郎らの資産家、佐野・城東・榛原各郡四十村の住民らが集まりました（※『掛川市史』は四十五村としていますが、重複を省くと四十村）。

計画の実現に向けて報告会で大いに氣勢を上げた、はずだったのが、報告会の様子やその後の動きについて記した文書は、『山崎家文書』に残っていません。計画はここで立ち消えとなってしまったようです。

二、計画の背景

（ア）明治十年代の干魃

佐野・城東両郡（※両郡を合わせて小笠郡が発足するのは明治二十九年）は古くから干魃に悩まされ多くの溜池が造られていたことは、『掛川市史』

や『大井川右岸用水史』（大井川右岸土地改良区、一九九〇年）などが指摘しています。『大井川右岸用水史』によると、明治十六年夏にも大干魃に見舞われて米の収量が大幅に減っています。

明治十年代に佐野・城東両郡を襲った干魃はこれだけではありません。『静岡県史』別編2「自然災害史」の付録「自然災害年表」（静岡県、一九九六年）から、明治元年から同三十年までの両郡の干魃記事を拾ってみましょう。

明治十一年五月十五日 東遠地方、天気続きで田の水涸れ、雨乞いを行う（『静岡新聞』）。

同十三年八月三日 城東郡、水田・陸田の水枯れ甚だしいと報道（『函右日報』）。

同十六年八月十八日 掛川で井戸涸れると報道（『函右日報』）。

同年八月二十二日 遠州城東郡干魃、畑作物に被害と報道（『函右日報』）。

同年十月七日 掛川で飲料水に困り井戸掘るが効果なしの報道（『函右日報』）。

同十七年六月十日 遠州山名郡東部六十日間降雨なし、田植え困難（『静岡大務』）。

同年 この年、県内各地で稲不作。遠州山名郡水旱虫害により減収、城東郡南部粗悪米収穫、（略）城東郡地租の補助、豊田・城東郡地租延期（『静岡大務』）。

同十九年七月十三日 榛原・城東・君沢地方で田畑に被害、雨乞いの報道（『静岡大務』）。

同二十六年六月下旬 掛川地方大旱魃で稲作大半が半作（『掛川市誌』）。

以上の記事を見ると、明治十年代後半に、特に城東郡で干魃の被害が大きかったことがうかがえます。千三郎らが明治二十年頃に大井川疎水を検討し始めた理由は、ここにあるといえるでしょう。

(イ) 東海道鉄道掛川駅の誘致運動

明治十九年頃に山崎千三郎らは、遠州灘沿いに計画されていた東海道鉄道（現在のJR東海道本線）のルートを東海道沿いに変更するよう求める運動を展開しました。

千三郎らはおそらく、この運動の中で城東郡を实地に見て歩いたのでしよう。政府への上申書と思われる「東海道鉄道線路之儀ニ付上伸」（『松ヶ丘山崎家略譜稿本』）には、遠州灘沿岸つまり城東郡から天龍川の河口までの地域について「沿通地方ノ景状ヲ察スルトキハ、茫々タル原野ナリ、只山腹ニ非サルノミ。渺々タル砂漠ナリ、只窮谷ニ非サルノミ。到ル処窮郷僻色ニシテ」（句読点は筆者）と評し、このような地域ではなく、東海道の宿駅として栄えた地域に鉄道を通すべきだと主張しています。

しかし、大地主であった千三郎は、「茫々タル原野」「渺々タル砂漠」も、水さえあれば豊かな農地に一変すると思えたのではないのでしょうか。「佐野線」については、山崎家などの地元であり、同家所有の田地も多くが佐野郡にあり干魃に苦しむことがしばしばあったので、計画に加えたのでしよう。

三、各地の用水事業

明治十年代には、全国各地で大規模な農業用水事業が進められていました。日本三大疎水のうち安積疎水（福島県）は明治十二年に着工し同十五年にほぼ完成、那須疎水（栃木県）は同十八年の着工で同十九年の完成、明治用水は同十二年に着工して十七年に完成しています。

遠州地方でも、天竜川の水を引いて磐南平野を潤そうと社山疎水（現在の磐田用水）が明治十七年に着工しましたが、同二十一年に中止しています。

山崎千三郎らの大井川疎水計画も、時期的に考えてこれらの事業の影響を受けているはずです。以下、千三郎らが参考にしようとしたであろう用水事業について、それぞれ簡単にみていきます。

(ア) 安積疎水

安積疎水は明治十年に大久保利通の建言で、士族授産のために猪苗代湖

の水を安積原野に引いた事業です。『新版角川日本史辞典』（角川書店、一九九六年）によると、全長四十キロ、工費は六十万円でした。

『山崎家文書』の大井川疎水に関する文書は「大井川疎水工事関係書類入」と題された封筒に一括して入っていました。そこに入っていた書類名も封筒に列記されていて、その中に「猪苗代湖水利見聞略記 一冊」という記載があります。残念ながらこの一冊だけは失われてしまったようですが、千三郎らが「猪苗代湖水利」（安積疎水）を参考にしたことがかがわれます。

千三郎が頭取を務めていた掛川銀行は、製糸金融を目的として福島県の三春と二本松に出張所を設けていました（『掛川市史』下巻）から、出張所から安積疎水の情報が入っていたのででしょう。

なお、岡田良一郎は明治十八年十月、千三郎の跡を受けて掛川銀行頭取になっていますが、同二十一年十月二十日から二十八日にかけて福島県に行って三春出張所などを訪れています（『海野福寿編『岡田良一郎年譜』（大日本報徳社、一九七二年））から、『見聞略記』は良一郎が記したのかもしれません。

安積疎水の視察は、用水の効果や技術面での参考にはなっただけですが、資金の工面という点では参考にはならなかったはず。というのも安積疎水は国営事業だったのに対し、後述するように大井川疎水計画は民間主導で国や県の補助にはそれほど期待できなかったのですから。

（イ）明治用水

明治十七年、矢作川の水を現在の愛知県安城市やその周辺に引く明治用水が開通しています。『新版角川日本史辞典』によると、幕末に豪農が建てた計画を商人の岡本兵松、豪農の伊予田八郎が受け継ぎ、愛知県が資金の一部と工事総監督を担当して十七年に開通しました。

『明治用水いま・むかし』（明治用水土地改良区、二〇〇四年）によると、明治用水は文政十年（一八二七）、三河国和泉村（現安城市）の都築弥厚が幕府に矢作川からの用水を掘ることを出願し、測量を終えた後の天保四年（一八三三）に許可が出たのですが、領主や農民の反対で実現でき

ませんでした。

反対の理由は①矢作川の水を引くと台地が水浸しになる②たき木や肥料を採る入会地がなくなる③用水の用地となる土地がつぶれる―だったといえます。

明治五年（一八七二）に石井新田（現安城市）の岡本兵松、阿弥陀村（現豊田市）の伊予田与八郎が別々に愛知県に出願し、県は一つにまとめて用水工事を許可しました。

二人は工事費を集めるのに苦労しましたが、六人の協力者から計六万円を集めることができ、明治十二年に着工。県土木課長の熱心な協力もあり、同十三年四月に完成式を行い、同十八年までにはほぼ現在の明治用水が完成しました。

用水の総延長は約二百八十キロ、かかった経費は十六万三千円。新たに水田になった土地一千平米当たり二円を集めて工事費に充てたといえます。農林水産省ホームページの「明治用水」項は「同じ時代の安積疎水、那須疎水と違い、民間の着想と資金調達だけでこの歴史的大事業を成し遂げたこととなります」と評価しています。

なお、六人の協力者のうち最初に岡崎宿（現岡崎市）の豪商田中勘七郎が工事費用の半額を拠出してくれることになったのですが、残り半分の出資者がなかなかみつかりませんでした。数十日捜した末に、海西郡福原新田（現愛西市）の加藤太兵衛の協力を得ることができ、その後さらに四人の協力者も得られたといえます（『愛知県三河国明治用水歴史』（齋藤長吉編輯兼発行、一九一六年）国立国会図書館デジタルコレクション）。

『掛川市史』下巻によると、山崎徳次郎らは明治二十一年四月、三河疎水を視察していますが、この「三河疎水」というのは明治用水を指すと考えられます。「民間の着想と資金調達だけで」成功させた明治用水は、大井川疎水のモデルとすべき事業だったはずです。

（ウ）枝下用水

千三郎らが静岡県令に大井川疎水工事の「測量願」を出したのが明治二十年十二月ですが、ちょうどその頃、明治二十年十二月二十四日に愛知

県の許可が正式において開削事業が始まったのが、矢作川の水を現在の豊田市南西部に引く枝下（しだれ）用水（現在は明治用水の一部）です。「豊田市近代の産業とくらし発見館」の平成二十八年度企画展『枝下用水130年史』などによると、枝下用水は明治二十三年に幹線（約二十一キロ）と東井筋（約九キロ）が通水し、同年八月三日に竣工祝賀式が行われています。

熊澤美弓「枝下用水を巡る人々」〔『矢作川研究』No.17（二〇〇三年）〕によると、明治用水と同じく矢作川から水を引く枝下用水は、当初は都築弥厚の計画に含まれていましたが、計画が縮小されたため、現在の豊田市南西部一帯では依然として溜池に頼っていました。

明治十年頃から地元の「七人組」と呼ばれる人たちが用水路工事を計画。同十三年には名古屋・東京・丹羽郡（愛知県西部）などの実業家八人による「矢作川分水用水開削願」が出されたのですが、これも実現にいたりませんでした。

同十六年には愛知県の主導で開削が始まりましたが、翌年の矢作川の洪水によって破壊されてしまいました。同十九年になって、長府藩出身の実業家時田光介らが「用水路自費開削許可願」が愛知県知事に出して許可され、翌年には近江商人で大阪銀行創設発起人になるなど企業家として活躍していた西澤真蔵も計画に加わりました。

伊藤俊満『水神 西澤真蔵 枝下用水の原点を求めて』（愛知県教育文化振興会ホームページ）によると、枝下用水によって灌漑される地域が真蔵の取引先の一つだったため、出資を懇願されたということだ。

明治二十三年に完工式が行われたのですが、この時点で完成したのは予定していた水路の半分程度。にもかかわらず工費は予算額の二倍の六万円もかかってしまいました。これは、洪水によって破壊された水路や堤防の修復工事に費用がかかったためでした。

これ以降は県や時田光介が開削事業から手を引いたため、真蔵が責任者となって工事を進めていきました。真蔵は海外にまで事業を広げて巨万の富を手にしていたのですが、この枝下用水工事のために財産のほとんどを使い果たしてしまったといえます。

(エ) 社山疎水

次に、社山疎水について、農業農村整備情報総合センターのWebサイト『水土の礎』によってみてみます。

磐南平野に天龍川から水を引こうという計画は、江戸時代後半に幕府の役人犬塚祐一郎によって立てられました。平野最北端の社山にトンネルを掘って用水を造ろうというものでしたが、実現できませんでした。幕末になって有志が計画案を幕府に上申したものの、幕府倒壊でこれも消滅。その後も明治六年と同十一年にも浜松県などに上申しましたが、いずれも実現にはいたりませんでした。

明治十六年、周智郡長足立孫六が七十村余りを取りまとめて内務省の許可を得ることができました。国や県の助成を受けて工事が進められたのですが、同二十年頃になって、設計ミスで社山トンネルの出口が数メートル高くて水が流れないことが判明。明治二十一年八月、工事の中止を決めました。

事業費は、当初の見込み十六万円（うち政府の補助六万円）で、その後さらに六万円の補助が認められた（『嶽陽名士伝』『足立孫六之伝』（山田萬作編輯兼発行、一八九一年））のですが、残念な結果に終わったのでした。

このとき、ちまたでは「社山 山のキツネにだまされて 金は出したが水はコンコン」という唄がはやったということでした。

その後、昭和四年に県議会で磐田用水幹線改良事業が可決され、同八年に着工。日中戦争、太平洋戦争による資材不足や物価高騰で工事が停滞したのですが、金原治山治水財団の寄付などのおかげで同十九年七月、磐田用水は完成したのでした。

山崎千三郎らの大井川疎水計画は、おそらくこの社山疎水工事の着工に刺激されたのでしょう。しかし、大井川疎水の工費は社山疎水の倍以上と見込まれ、しかも社山のように失敗する恐れもないわけではない。これでは、佐野・城東両郡の資産家達の腰が引けてしまうのも無理はありません。

(オ) 大井川疎水計画との比較

明治、枝下、社山の各用水事業には、以下の共通点を指摘できます。まず、江戸時代から計画があったこと。明治、枝下両用水は地元の強い反対がありました。

両用水は、明治時代になって工事が始まってからも反対する村々がありました。明治、枝下両用水を推進した岡本兵松は「工事ができあがれば、恨む村は三か村、喜ぶ村は数十か村、なにほどのこともない」と言って、工事を進めました（前述の水土里ネット『明治用水』）。

社山疎水の場合は、幕末から明治初頭にかけて地方行政制度がめまぐるしく変わったため、なかなか着工にいたりませんでした。足立孫六のリーダーシップによって着工にこぎつけたのです。

一方、大井川疎水については、山崎千三郎らの前に構想があった形跡が見当たりません。突然提案された用水計画で、自分の土地が用水の経路に当たる地主の中には、納得しない者もいたことが予想できます。

また、『掛川市誌』は「当時の人々はこの大規模な計画を千三郎の道楽だと笑った」と記しています。実現可能性の低い計画だと冷笑し、協力的ではない風潮があったことがうかがわれます。

次に指摘できるのは、大井川疎水計画が明治・枝下・社山各用水事業の何倍もの工費が必要だと見積もられたことです。大井川疎水計画の工費は土地代を除いて四十万円だったのに対し。明治用水は十六万三千元、枝下用水は六万円、社山疎水十六万円でした。大井川疎水の場合、大井川から佐野・城東両郡に水を引くためには長大なトンネルを掘る必要があったために工費が膨らんだのではないのでしょうか。

明治用水の場合は、事業の中心は地元の岡本兵松と伊予田与八郎で、最大の出資者は近隣の岡崎宿の田中勘七郎でしたが、それだけでは足りずに県西部の加藤太兵衛らの協力を仰がねばなりません。枝下用水の実現には、それまでは地元と取り引きがあったというだけの関わりしかなかった西澤真蔵の存在が不可欠でした。

また、社山疎水は足立孫六が中心でしたが、このときの工事は失敗に終わり、成功のためには金原治山治水財団の寄付が必要でした。

これに対し、大井川疎水計画では千三郎、河井重蔵ら佐野郡の資産家が中心となり城東郡からも三橋四郎次、丸尾文六が加わるという陣容で、地元の資産家の名前しかみられません。他からの資本導入がない限り、計画の実現は難しかったでしょうが、そのような試みがあった形跡はみられません。

四、松方財政の後遺症

関口隆吉が静岡県知事となる前、元老院議員だった明治十六年に地方巡察使として関東・東海地方の一府八県を視察しました。このときの静岡県分の復命書が『関口元老院議官地方巡察復命書「静岡県」』（関口泰編輯、一九四〇年、巖松堂書店）として出版されています。

同書は明治十六年当時の静岡県の現況を記していて興味深いのですが、ここでは「土木起工ノ現況」からいくつかの項目を引用します。

一、東海道々路ハ県属ニシテ、追々之レガ改良ヲ謀ラントスルモ、方今地方費多端ナルガ故ニ、忍ンデ只姑息ノ補繕ヲ加フルニ過ギズ。

(略)

一、河港堤防ハ、曩ニ国庫支出ヲ廃セラレタルヨリ、従前官営ノ堤防等ハ悉皆之ヲ町村属ト為スモ、其経費ニ至ツテハ町村一切負担シ得ルノ見込ナキヲ以テ、前官給ノ額ヲ地方税ノ補助ニ採リ施工セシメシニ、昨今非常ノ多額ヲ要シ(略)

一、不毛地開墾等、追々人民公益上ニ着眼シ、疎水開鑿又ハ静岡清水間ニ鉄道敷設等ノ事ヲ熱心シ、三四ノ大事業ヲ起サント大ニ憤発心ヲ起セリ。

ここからは、主要幹線道路のほずの東海道（県の所管）でさえも「姑息ノ補繕」を加えることしかできず、町村の管轄とされた河港堤防の整備のための経費も町村は負担できないといった、厳しい地方財政事情がうかがえます。

安積疎水もその一例とされる明治時代前期の殖産興業政策は、明治十四年に大蔵卿に就任した松方正義によって放棄され、増徴した租税が軍備拡張要求にこたえるために使われたこと（『新版角川日本史辞典』「松方財政

項」が、地方財政困窮の原因でした。このような中で、社山疎水のことと考えられる「疎水開鑿」などの事業が進められたと、関口元老院議員は指摘しています。

大井川疎水計画が発案された明治二十年頃になっても、地方財政が大幅に好転したとは考えられません。国の補助を受けた社山疎水が失敗したことを考えれば、千三郎らは国や県には多くを頼り難かったはずで、民間が主体にならざるを得なかったと考えられます。

五、第一回衆院選

枝下用水における西澤真蔵のような存在がなかったにしても、佐野・城東両郡の資産家達が一致協力すれば、大井川水は実現したのかもしれない。しかし、それがかなわなかった一因に、地域の有力者の間で政治的な対立が生じていたことが考えられます。

明治二十三年十一月の第一回帝国議会開催に向け、同年七月に第一回衆院議員選挙が行われます。政府は当然、それ以前から選挙法などの準備をしていました〔末木孝典「明治期小選挙区制における選挙区割りと選挙区人口」(『選挙研究』三〇巻一号、二〇一四年)〕から、資産家達は来る選挙を意識しなくてはなりません。

第一回衆院選挙で佐野・城東・榛原の三郡は静岡第四区でした。このときの選挙結果は次の通りです〔『静岡県政史話』(静岡県、一九二九年)〕。

当選・岡田良一郎	一三八八票
丸尾文六	一一八八票
三橋四郎次	八票
板倉甫十郎	六票
河井重蔵	三票

(以下七人は省略)

大井川疎水計画に関わったとみられる資産家のうち太字の四人が立候補しています。千三郎は立候補していませんが、東海道鉄道掛川駅誘致や大井川疎水計画で行動をとにした河井重蔵を支援したのだと考えます。

政治的な対立があっては、それぞれの家を傾けかねない大事業に一致協

力して取り組むのは難しいでしょう。なお、山崎徳次郎は、明治二十二年、息子覚次郎の東京帝国大学卒業に伴い、掛川を離れて上京しています。

こうして、いったんは盛り上がりを見せたかと思えた大井川疎水計画が頓挫した後、千三郎は掛川と森との間の交通路の整備に尽力します。明治二十三年に掛川森間道路に着工、同二十五年に完成させます。翌二十六年には掛川森間馬車鉄道敷設を願、二十八年には掛川二俣間鉄道敷設を願しますが、二十九年にはその結果をみることなく四十二歳の若さで亡くなっています。

おわりに

山崎千三郎らによる「大井川疎水計画」が立ち消えとなった後、大井川から小笠郡に水を引くという構想は、戦後すぐの昭和二十一年に小笠用水施設期成同盟会が発足して実現に向けて動き出し、同二十三年に農林省が調査を開始。同三十二年に起工式、同四十三年に国営大井川農業水利事業の竣工式を行いました（『大井川右岸用水史』）。

千三郎らの計画から国営大井川農業用水事業の完成まで八十年近い年数が経っていたことになります。では、この間に大井川用水に関しては何の動きもなかったのでしょうか。

明治時代に静岡県技師を務めていた山本正至が、『牧野原疎水事業経始』という調査報告書を残していることが『京都大学学術情報リポジトリ』所収の鈴木武雄「『幾何学原論』の翻訳者山本正至について」（二〇一一年）に記されています（以善会・佐藤四郎さんの御教示による）。

この論文によると、取水場所は千三郎らの計画（現島田市神尾）や現在の取水場所（同市神座）よりはるか上流の上長尾（現川根本町）。資金計画は総計五十八万円四千六百八十三円余で、資金償却方法なども記載されています。

『牧野原疎水事業経始』を未見のため、この調査がいつ行われたのかなど詳細はわかりませんが、山本正至は社山疎水の測量を行った人物であり、社山疎水の失敗に懲りて取水場所を上長尾としたのかもしれない。

いずれにしても、旧小笠郡の各地域に多大な恩恵を与えてくれている大

井川からの用水の歴史については、千三郎らの計画も含めてまだまだ不明な点が多くあります。本稿がきっかけとなって研究が進み、大井川の恵みが改めて認識されることになれば幸いです。

(了)